

## 高校時代の 転換期

# 高校で出会った新たな価値観が 今なお主体的な自分をつくってくれた

自分の考えで道を選び、自分の将来に、そして社会に役立つ活動をしている大学生に、  
転機となった高校時代の体験を聞いた。

## 今に生きている、私を変えた 高校時代のディベートの経験

岩手大人文社会科学部国際文化課程2年

(岩手県立盛岡第三高校卒業)

三好彩夏さん

### 予期せぬ反論を受けて 何も言えなくなった

私は中学生の頃から小説家になるのが夢でした。中学時代の私は内向的で、休み時間に教室の隅で1人、文章を書いているような生徒でした。人前で何かを主張することも苦手で、親しい人たちの中においても、人数が多くなり「集団」になると、それだけで緊張して何も言えなくな

ることがよくありました。

そんな私を大きく変えたのが、高校2年生の2学期に始まったディベートでした。私が卒業した岩手県立盛岡第三高校には、「総合的な学習の時間」で行う「Dプラン」(\*)という活動があり、考える力を養うためのさまざまな取り組みがありました。その中の2年生で行う取り組みの柱がディベートでした。クラスメート4人とチームを組み、リーグ

戦形式で自分のクラスや他クラスのチームと対戦し、勝ち残ったチームが大ホールでの決勝大会に進みます。私が参加した時のテーマは「尊敬

死を法制化すべきか否か」。私の役割は相手の意見に反論する「反駁」でした。1か月の準備期間、インターネットや書籍で障がいのある方や介護に携わっている方などの声を集めたり、関係する法律を調べたりした上で、チームでじっくり話し合っ

た。万全の態勢で臨んだつもりでしたが、実際のディベートは予想外の連続でした。否定側だったため、賛成側の意見は何も調べていませんでした。こちらが思ってもみなかった意見を相手チームから返されて、反論

できないことが何度もありました。

また、ある日のディベートでは、多くのチームが「自己決定権」という言葉を多用して論を展開しました。ところが、終了後、先生から「未成年は、親の同意なくして自己決定権は使えない」と指摘され、何も言えなくなりました。指摘されたこともありました。どのチームも事件や事例は調べていましたが、権利がどこまで適用されるのかは調べきれいでなかったのです。自分たちの未熟さ、ふがいなさに誰も声が出ませんでした。

### 自分の意見は自分のもの 人と違っても構わない

私たちのチームは決勝前で敗退、ディベートは4、5回したただで終

\*「Dプラン」の詳細は、『VIEW21』高校版2012年10月号「指導変革の軌跡」(P.22~25)を参照



母校の岩手県立盛岡第三高校にて。ディベートを行った思い出深い教室。

わかりました。しかし、その数回のディベートは、私に今まで知らなかった多くのことを教えてくれました。正しいと思いき主張したことが真つ向から反対される、矛盾を突かれて何も言えなくなるという経験は初めてでした。私は自分の論が正しいと思つて主張しているのに、別の側面から見ると全く違う見方も出来る。

自分の意見は絶対ではなく、世の中にはさまざまな考え方があつた。いろいろな意見に耳を傾ける中で、価値観が広がつていくのを感じました。

普段、たわいのない話をしていゝクラスの友だちが、私が調べていゝかしたことを知つていゝ、私が思つたこともない考えを持つていゝことにも驚かされました。逆に、私が主張したことに対して、「そういう考え方もあるんだね」と感心されることもありました。互いの考えを認め合ふことで、共に成長していゝことの大切さも知りました。今考えると当たり前のことばかりですが、当時はそんなことは考えたこともなかつたので、全てが新鮮な驚きでした。

ディベートからもう1つ学んだのは、自ら取り組めば、それだけ得るものも大きいということです。ディベートでは、反駁するために相手の主張を一生懸命に聞かなければなりません。私自身も相手の話を聞きまゝすし、同じように対戦相手や聴衆も私の意見に耳を傾けてくれます。話を聞こうとするクラスメートの真摯

な姿勢が私を勇気付けてくれ、回数を重ねるごとに、主張すること、自分を出すことの面白さややりがいを感ずるようになりまゝした。人の話をただなんとなく聞いていゝだけではなく、自分の意志や考えを持つて、それを声に出したり行動に移したりするのは素晴らしいということに初めて気付いたので。

### 高校時代に培つた主体性で自分の世界を広げていく

私は、岩手大の人文社会科学部でフランスの言語や文化について学んでいます。

大学に入つてからは、視野を広げるためにいろいろなことに挑戦してゝいます。1年生の後期にあつた初年次ゼミは、希望すれば他学部のゼミを受講できる選択科目です。修得できるのは1単位なのであまり人気はありませんが、私は山林や入会地いりあいちについて学ぶ農学部のゼミに参加しました。2年生になると専門分野の授業が始まり、理系の授業を受けられる機会は少なくなるため、視野を広

げるために、あえて自分の専門から遠い理系のゼミを選んだのです。学習内容もさることながら、理系学部の学生と一緒に学ぶことによつて自分にはない発想に触れることも多く、自分の世界を広げる上でも良い経験になりました。

国際文化課程は留学生が多く、多様な価値観に接することが出来ます。留学生はさまざまな価値観や考え方を持つており、その中には共感できないものも少なくありません。だからといって、全てを拒絶していゝては何も生まれません。異なる価値観を受け入れることで視野は広がつていくものであり、社会の共生も実現するのではないのでしょうか。

小説家という夢は今も変わらまゝです。しかし、そのためのアプローチは、中学・高校時代とは全く違ひまゝです。岩手県には、出光イーハトーブトライアル大会という全国的に有名なトライアル用モーターサイクルの競技会があります。このイベントを小説の題材にしたいと思ひ、大会の主催者の方にお願ひして、定期的に

取材させていただいています。内向的だった自分が、このように主体的に行動できるようになったのは、高校時代のデイベートの経験が今に生きていくからだと思います。

受験勉強で忙しかった高校時代と違い、大学生の今はたくさん時間があります。だからといって楽ばかり

していると、あつという間に時間は経ってしまい、何も得るところがないまま4年間で過ぎてしまうでしょう。せつかくたくさんの時間があるのだから、今しか出来ないことをしたい。そうすることで、大学生活はより充実し、将来の可能性も広がっていくのだと信じています。

## 視野を広げ、将来の夢を育むことにもつながった、高校時代のボランティア活動

青山学院大法学部法学科4年

(神奈川県・私立サレジオ学院中学・高校卒業)

北村勇氣さん

### ボランティア活動での出会いが自分の世界を広げた

私立の中高一貫校に入学して、初めて自分の成績を見た時のことは今でも忘れられません。180人中176位。それが私に突き付けられた現実でした。

中学校に入学したばかりで、中学受験と中学校での勉強の違いが分かっていなかったのも原因だったと

思います。しかし、小学校時代の成績は常にトップクラスで、それを自分のアイデンティティーにしていた私にとって、勉強で人に負けるのは初めての経験でした。勉強で勝てないとしたら自分は何をすればよいのだろう。これが北村勇氣だと言えるようなものをもう一度つくりたい。そういう思いで必死に取り組んだのが部活動のバドミントンでした。

週7日の活動も珍しくない厳しい

練習の中で、顧問の先生からは競技の技術はもちろん、礼儀や挨拶も徹底的に鍛えられました。必死で練習に打ち込んだおかげで、1年足らずで上級生に勝てるようになり、2年生以降は副部長を務め、選手としても部のエースとして活躍できるようになりました。小学校時代は勉強ばかりでスポーツは苦手でしたが、努力すればスポーツでも自分は通用することが分かり、大きな自信になりました。

それでも、その頃の生活は勉強と部活動だけ。仲の良い十数人の友だちとの付き合いが私の世界の全てでした。その生活を変えるきっかけになったのが、高校2年生の時に参加した校外のボランティア活動です。関東一帯の高校生によって組織されたボランティア団体が、多摩川の河川敷で清掃活動を行っていました。クラスメートに誘われるまま、その活動に参加したのです。

当日は驚きの連続でした。共学、男子校・女子校、国公私立など、あらゆる種類の高校の生徒が集まり、学校や地域の垣根を超えて交流している。団体の代表者が新聞社のイン

タビューを受け、大人と対等に話をしている。自分と同じ高校生が、自分たちの意志で行動し、外の世界とつながっている。その姿は、部活動と勉強しか知らなかった私には大きな衝撃でした。

世の中にはこんな世界があるんだ、世界はこんなに広いんだという思いが、ふつふつと湧いてきました。同時に、自分もこういう世界に飛び込んでみたいと強く思うようになったのです。

### 多様な友人との交流で夢を持つ大切さを知る

もう1つ、その時に私が初めて知ったことがありました。人のために行動する素晴らしさです。

勉強にせよ部活動にせよ、今までしてきたことは全部、自分のためでした。親や先生に認められたい、みんなから「すごいね」と言われたい。その一心で学校生活に打ち込んできました。しかし、多摩川の河川敷でゴミを1つずつ拾ううちに、自分も人のために出来ることがあると思えるようになったのです。ゴミ拾いは私にとって生まれて初めての、世



北村さんが経営に参画している渋谷の会員制レンタルスペース「サクラボ」にて。

界に対するアプローチでした。

その後、メンバーに誘われるまま団体に所属し、外部との交渉を行う外務担当の幹部に抜擢<sup>ぼつこ</sup>されて、1年間活動を続けました。

私の学校では、高校1年生の春から大学入試に向けた準備が始まります。親はボランティア団体の活動をするので勉強がおろそかになりは

しないかと心配しましたが、担任の

先生は勉強や部活動と両立できるならやってみると言って励ましてくれました。外の世界に触れる経験は学校内の活動にもありましたが、先生方は学校内外で多様な価値観や考え方に出来る限り触れさせたいと思っていたようです。クラスメートの中にも、声を掛けていくうちに応援してくれる人が増えていきました。

団体には専門学校生も多く、将来の夢や志を明確に持っていることも、大学進学しか考えていなかった私には新鮮でした。その頃の自分には夢がありませんでしたが、自分は大学に入って夢を探そうと決めました。漫然と大学生活を過ごすのではなく、将来の夢を見つけるために大学に進む決意を新たにしました。

### 新規事業やイベント企画の立ち上げなど次々とチャレンジ

大学受験では、環境面で世界に貢献するという観点で志望進路を検討し、環境法を学ぶために法学部を選びました。

大学に入ってから、いろいろなサークルに所属して活動をしたものの、高校時代に打ち込んだボランティア活動のような手応えを感じることはありませんでした。唯一、茶道部には所属し続けましたが、それだけでは満足できず、自分の個性を発揮する場所が欲しいと考えるようになりました。

1年生の終わり頃から、私は再び学外の団体に所属するようになりました。アフリカの子どもに食糧支援を行うNPO団体「TABLE FOR TWO」の青学支部が潰れかけていたのを友だちと一緒に立て直しました。働く目的を社会人と学生が一緒に考える「ハタモク」という団体の立ち上げと運営にも携わりました。目標や居場所を失いかけていた私にとって、大学2年生の活動が第2の転機になりました。

茶道部の影響もあり、この頃から日本文化を世界に伝えていくことが、生涯をかけて打ち込める仕事になるかもしれないと考えるようになりました。3年生の夏休みには、海

外にも販路を持つ京都のお米屋さん頼み込んで、住み込みで1か月間、インターンをさせていただきました。現在は、外国人が通う日本語学校で日本文化講座の講師として日本文化を伝える仕事をしたり、0から6歳の伝統ブランド「aeru」を展開する株式会社和<sup>わ</sup>えるなど、いくつかの会社で働いたりしています。他にも、学生向けの事業やイベントの設計などを通して多くの仲間を得ることが出来ました。

自分からつかみに行かなければ何も得ることは出来ません。現状を変えることも出来ません。高校時代のボランティア活動から学んだ教訓が、大学生生活を充実させ、将来の夢を育むことにもつながったのだと思います。

卒業後は就職して自分を磨き、ゆくゆくは日本文化を発信する仕事に就きたいと考えています。自分で起業するか、別の会社で働くかは分かりません。その時が来るまでに実社会で経験を積んで力を蓄え、いつか夢を実現させたいと思っています。